

原 著

女子医学生アンケート調査によるファミリーサポートを通した キャリア教育の可能性の検討

¹東京女子医科大学女性医師・研究者支援センター²東京女子医科大学医学部衛生学公衆衛生学（一）教室³東京女子医科大学医学部国際環境熱帯医学教室⁴東京女子医科大学附属遺伝子医療センターノハラ ミチコ^{1,2}・サクライ ミキ³・サイトウカ ヨコ^{1,4}
野原 理子^{1,2}・櫻井 美樹³・斎藤加代子^{1,4}

(受理 平成25年6月21日)

Possibility of Career Education through Family Support: Questionnaire Survey among Female Medical Students at Tokyo Women's Medical University

Michiko NOHARA^{1,2}, Miki SAKURAI³ and Kayoko SAITO^{1,4}¹Support Center for Women Health Care Professionals and Researchers, Tokyo Women's Medical University²First Department of Hygiene and Public Health, Tokyo Women's Medical University³International Affairs and Tropical Medicine, Tokyo Women's Medical University⁴Institute of Medical Genetics, Tokyo Women's Medical University

Preventing female doctors from quitting work because of pregnancy or child rearing responsibilities is the key to maintaining the quality of Japan's healthcare system. Family support (a system whereby the user pays for a babysitting service offered by a qualified provider in the neighborhood) can aid female doctors' career development when they are rearing children. We hypothesized that family support activities allow medical students to communicate with female doctors and obtain an idea of their future. An anonymous self-administered questionnaire was distributed to Tokyo Women's Medical University's female students to study their interest in and recognition of family support and career education. Five hundred and forty-four students responded (84.1%); 53.9% wanted to participate in a training course for care providers, and 33.6% wanted to participate in related activities for reasons such as "wanting to become a future user of family support" and "wanting to support female doctors by babysitting." Additionally, 89.9% hoped to start a family in the future, and their future anxieties included marriage, child rearing, the work-life balance, and career development. These results show that family support activities can play an important role in career education by helping students obtain a clear idea of their future.

Key Words: family support, female medical students, female doctors, role model, career

緒 言

女性研究者の活躍は、今後、我が国が科学技術の分野において国際競争力を維持・強化する上でも、また多様な視点・発想を取り入れた研究活動を活性化させる上でも重要である。しかし、我が国の研究者に占める女性の割合は、12.4%（平成19年）と他の先進国と比べて2分の1から3分の1の水準となっている。特に理工系分野における女性研究者の

割合が低くなっている。この原因として、女性研究者は、出産・育児、介護等と研究活動を両立させるための制度が十分でなく、その間に研究業績が十分に上げられないことなどから、キャリア形成の支障となり、研究現場を離れざるを得ないことが多いこと、また、いったん研究現場を離れると、次の研究ポストを得ることが難しく、研究現場に復帰しにくいことが言われている。さらに、女性研究者が上位

の職に就きにくいことも指摘されているほか、女性研究者が活躍する場面が限られ、ロールモデルや職業をイメージとして描きにくいことが挙げられている¹⁾。

医学の分野においても同様のことが言える。昨今の医師不足に対して、新医師臨床研修制度、診療科や地域による医師の局在、労働基準法と現場の医師の勤務実態の乖離など様々な要因が検討され、その一つとして女性医師の子育てのための離職が挙げられている。我が国の医学部の入学者に占める女子学生の割合は4割を超え、医師国家試験合格者においても約4割が女子医学生となっている現在、女性医師の勤務の継続、キャリア形成を実現させることは、我が国の医療制度を充実させる上での最重要課題である。そのため、これまでも女性医師の勤務継続支援として、保育施設の設置や再教育制度など様々な対策が取られてきた²⁾³⁾。

しかし、それだけでは十分な成果が得られていない。医師になってからの支援のみでなく、今後は、医学部在学中から、女子医学生に対する有効なキャリア教育を行うことが重要と考えられる。そこで、女子医学生のキャリア教育の一つとして、ファミリーサポート活動を通してロールモデルである女性医師との交流を図ることによって、生きたキャリア教育が行えるのではないかと考えた。勤務継続が最も困難とされている子育て中の女性医師に対して、女子医学生がファミリーサポートとして実際に子育て支援を行う。その中で、ロールモデルである女性医師の生き方や医師としての仕事のやりがい、子育てとの両立について学び、漠然とした不安や疑問を取り除くことが可能となり、女子医学生自身が具体的な将来像を描くことが出来るようになると考えられる。

そこで、ファミリーサポートを通じた有効なキャリア教育を検討することを目的に、医学生に対してファミリーサポートやキャリア教育についてのアンケート調査を行った。

対象および方法

調査対象者は東京女子医科大学医学部学生647名とし、調査期間は平成24年9月1日から9月30日であった。調査票の配布および回収は、学年別に、各学年の授業時間または休憩時間に講義室で配布し、当日中に講義室にて直接回収した。調査では自己記入式アンケート調査票を用いた。調査項目は女子医大ファミリーサポートの認知度、保育サービス

講習会への興味と受講希望、行いたい支援内容、先輩医師から直接学びたい事項、キャリア形成についての教育内容、および回答者の属性とした。なお、すべての質問に回答できるよう、アンケートの初項でファミリーサポートの概要を説明したが、ファミリーサポートを知っていたか否かについての質問には、アンケート配布前の状況について回答するように説明を加えた。また、キャリア形成についての教育内容は、入学時のオリエンテーションでの「先輩医師と語る」、1学年時の「高齢者・乳幼児との対話」、1または2学年時の「奉仕学習」、毎年行われる「弥生記念講演」、3学年時の「女性医師のロールモデル・地域医療における活躍」および4学年時の「女性の一生についてのテュートリアル」となっているため、未履修のものについては興味のあるものとして回答するように回答欄に説明を加えた。統計解析はSASシステム Ver.9.3で行った。

ファミリーサポートとは、地域において育児や介護の援助を受けたい人で行いたい人が会員となり、育児や介護について助け合う会員組織である。この事業は働く人々の仕事と子育てまたは介護の両立を支援する目的から、労働省（当時）が構想し、設立が始まった⁴⁾。調査対象であった東京女子医科大学では、文部科学省周産期医療環境整備事業（人材養成環境整備）男女共同参画型NICU人材養成プログラム—地域とささえあう周産期医療—の一環として、2009年度に女子医大ファミリーサポートを立ち上げ2010年より支援活動を行っている⁵⁾。

なお、本研究は東京女子医科大学倫理委員会の承認（承認番号：2586）および、学内の関連委員会の承認を得た後に行った。

結 果

調査票の回収数は544通で回収率は84.1%であった。女子医大ファミリーサポートを知っていたものは29.6%であり、地域のファミリーサポートセンターを知っていたものは3.7%であった。

Fig.1にファミリーサポート講習会の受講希望の有無別にその理由を示した。全体では53.9%に受講希望があり、その理由として最も多かったのは「何かの役に立ちそうだから」であった。

次に、保育サービス講習会を受講し提供会員登録をすることへの希望の有無別にその理由をFig.2に示した。全体の33.6%が希望ありとしており、その理由としては、「自分も将来利用したい」「女性医師の役に立ちたい」「子育て支援をしたい」が多かった。

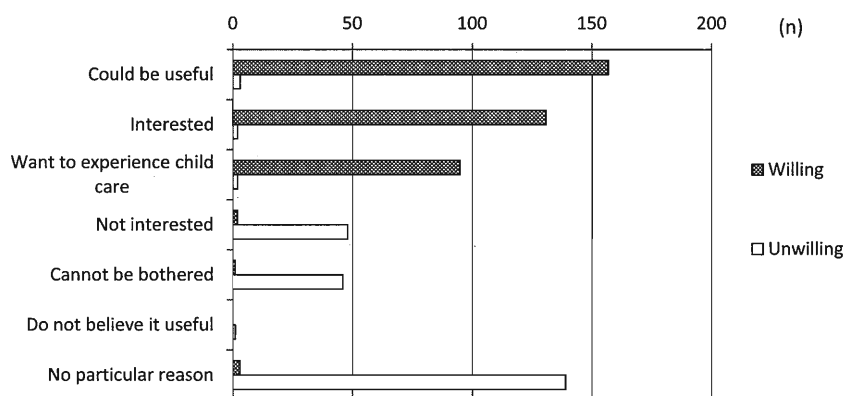


Fig. 1 Reasons for willingness or unwillingness to participate in the provider training course. (Multiple answers)

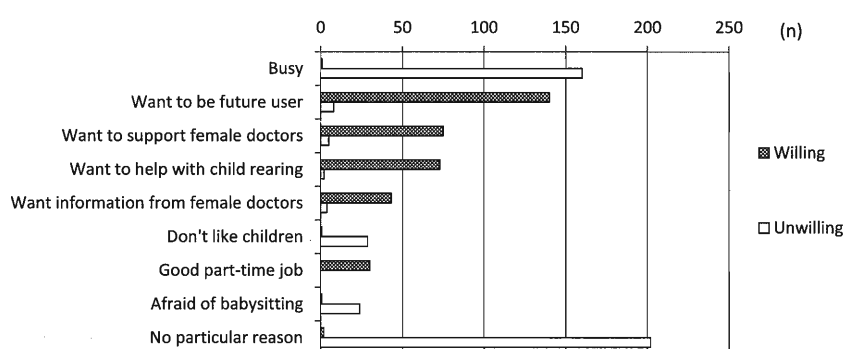


Fig. 2 Reasons for willingness or unwillingness to register with Tokyo Women's Medical University Family Support. (Multiple answers)

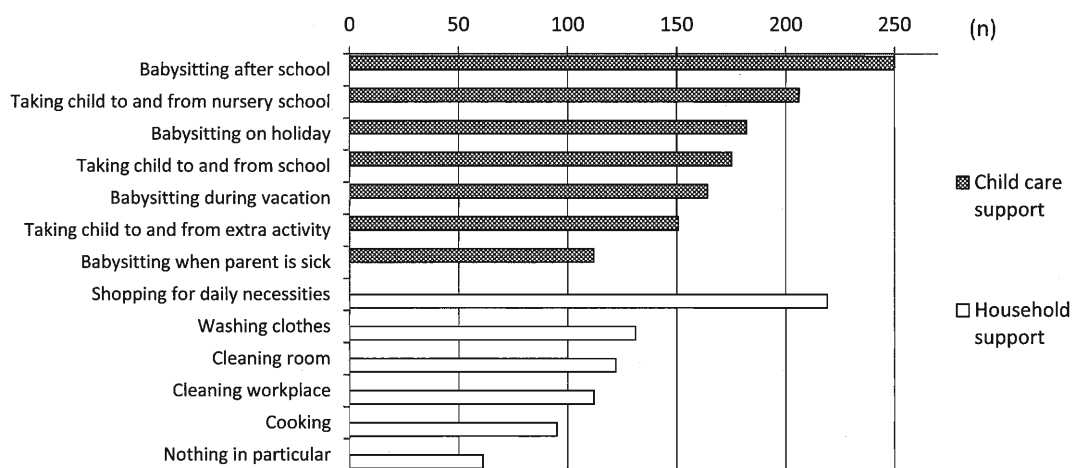


Fig. 3 Areas of support provided by students through family support activities.

これまでのボランティアの経験については31.3%があると回答していた。一方、希望なしは65.6%であり、その理由は「特に理由はない」と「忙しいから」が多かった。

保育サービス講習会の希望開催時期や時間については平日の夕方（授業終了後）を希望するものが最

も多く、学生である提供会員が行えると思う支援内容は、子育て支援である「放課後や学童保育後の預かり」「保育所の送迎」「休日出勤や学会時の預かり」の他、家事支援としての「日常品や食品等の買い物」との回答が多かった（Fig. 3）。

支援活動を通して先輩女性医師から学びたいこと

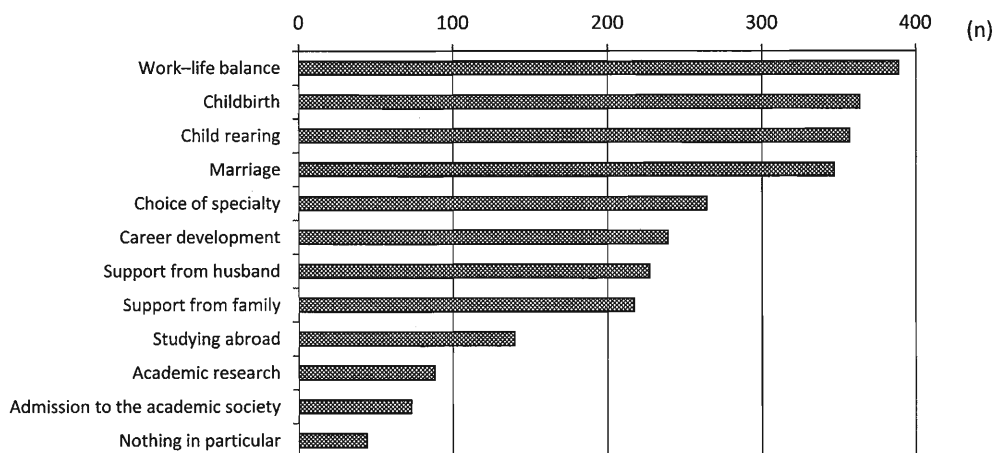


Fig. 4 Information students expect to gain from female doctors through family support activities.

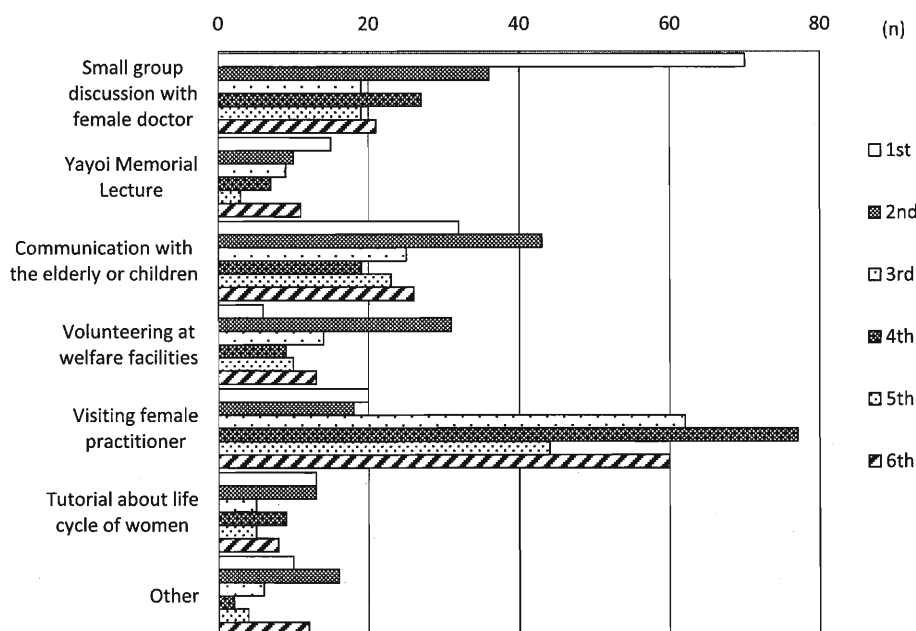


Fig. 5 Significant elements of the course for career development by year.

の全回答者からの結果を Fig. 4 に示した。多かった回答は、仕事との両立、出産、育児、結婚の順であった。

これまでの学部教育で受講したものの中でキャリア形成に有意義だと感じたものとしては、1年生で「先輩と語る」3年生以上で「女性医師のロールモデル・地域医療における活躍」が多かった (Fig. 5)。

将来結婚して家庭を持ちたいと回答したものは 89.9% であり、将来不安に思っていることは、結婚・妊娠・出産、ワーク・ライフ・バランス、キャリア形成であった (Fig. 6)。

最後に将来進みたい専門科を学年別に Fig. 7 に示した。内科の希望が一番多く、学年が上がるにつれ

その傾向が強くなっていた。

考 察

本研究では、女子医学生のカリヤ形成に対する認識や希望の現状を知り、医学部学生時期からのファミリーサポートによるキャリア教育について検討をすることを目的とした。本アンケート調査は1大学における調査であり、本邦全体の医学生の思考を反映したとは言えないため、本研究には限界が存在する。しかし、調査対象とした医科大学は、女性医師の育成において本邦を代表するモデル校であり、これまでに多数の調査や様々な取り組みが行われてきた。従って、今後取り組むべきキャリア教育

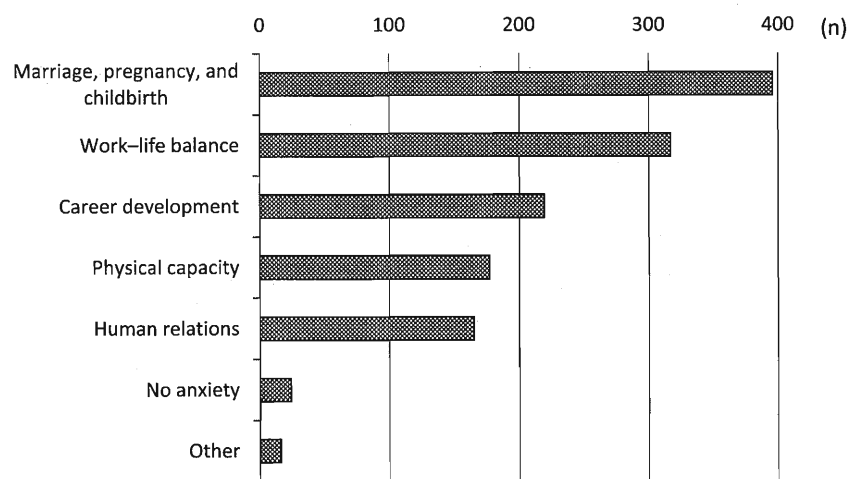


Fig. 6 Areas of concern with regard to the future.

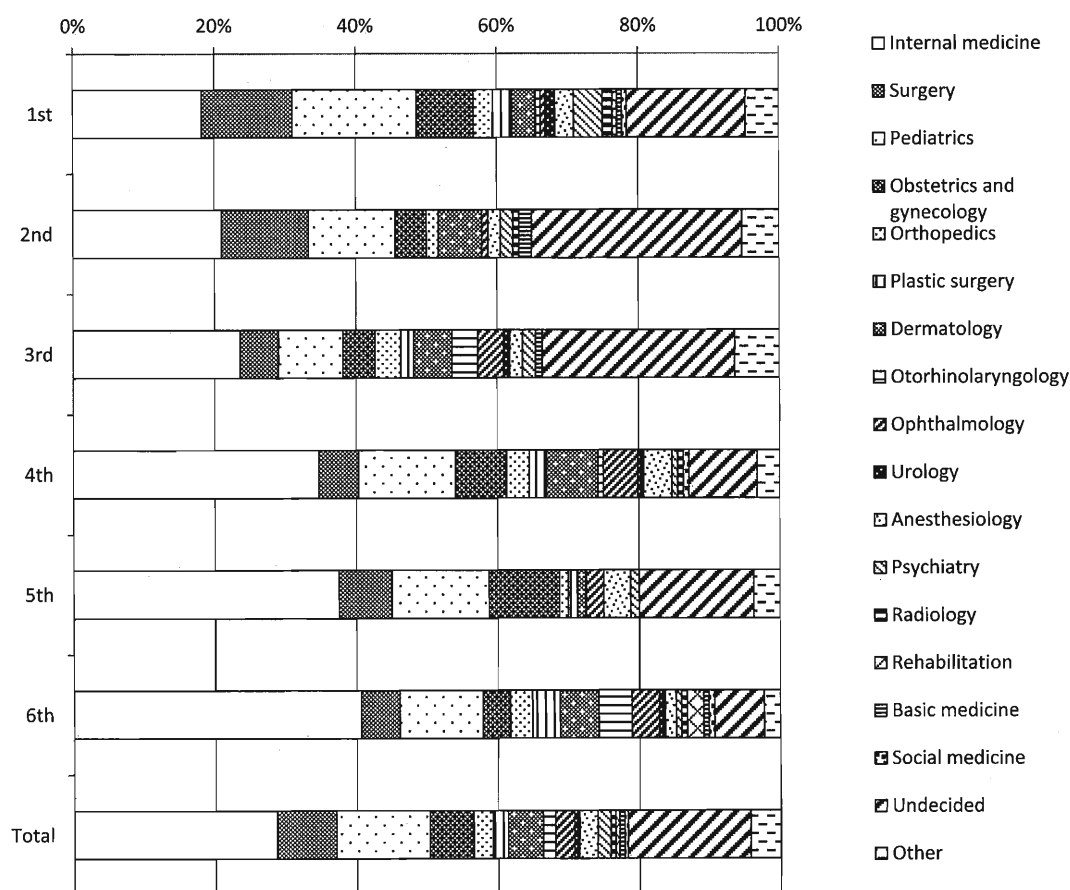


Fig. 7 Future choice with regard to preferred branch of medicine by year.

の基礎資料として、このような背景のある大学で調査を行うことは目的に合致している。またすべての学年から高い回収率で回答を得られていることから、本結果は女子医学生の思考の一部を明らかにしているといえ、ファミリーサポートという相互援助を通したキャリア教育という新たな教育方法を検討したことから意義ある資料と考える。

まず、本調査で女子医大ファミリーサポートを知っていたものは約3割であり、地域のファミリーサポートセンターを知っていたものが数%だったことと比較すると、学生の間でファミリーサポートの認知度が上がっていることが分かった。

学生自らがファミリーサポートの保育サービス講習会の受講を希望するか否かを尋ねた質問に対し

て、何かの役に立ちそうだから受講したいと回答するものが多く、受講希望は全体の半数以上に上っていた。次に、保育サービス講習会を受講し提供会員として登録を希望するものは全体の3割以上であり、その理由としては「自分も将来利用したい」との意見が最も多かった。調査回答者のうち、将来結婚して家庭を持ちたいとしたものは約9割おり、回答者が将来不安に思っていることは、結婚・妊娠・出産、ワーク・ライフ・バランス、およびキャリア形成であった。これらのことから、学生がファミリーサポートに対して興味を持っており、自らも担い手として活動することや、将来のファミリーサポート支援に期待していることが分かり、今後のファミリーサポート事業継続の必要性が示された。

さらに学生の回答では、ファミリーサポート活動を通して依頼会員である女性医師から「仕事との両立」「出産」「育児」「結婚」について学ぶことを希望していた。これまでの医学生に対する調査²⁾でも、医師として仕事を続けるために最も関心を寄せているのは「仕事との両立」「出産」「育児」「結婚」の4項目であり、ロールモデルの日常生活を知る機会を設ける必要があることは明確である。加えて、これまで受けた学部教育のうち、学生が最も有意義と感じたものは、数名の小グループで先輩医師と直接会話をする「先輩と語る」と、地域で活躍する先輩医師の病院や診療所に訪問する「女性医師のロールモデル・地域医療における活躍」であったことから、ロールモデルと直接接することは、学生にとって非常に印象深く、有効であることが分かる。

次に、具体的にキャリア教育としてのファミリーサポート事業を検討する上で、最も重要と考えられる相互援助活動の内容について考察する。回答した学生は、学生が行える支援として「放課後や学童保育後の預かり」「保育所の送迎」「休日出勤や学会時の預かり」および「日用品や食品等の買い物」等を挙げていた。

ファミリーサポート事業における育児支援は、乳幼児のみでなく、小学生までを対象としており、保育園の送迎に始まり、学童期の子どもの放課後の見守りなど、長期に継続した支援が可能であることが特徴として挙げられる。学童期の子どもに対する育児支援が必要なことは過去の医師に対する報告⁶⁾⁷⁾からも明確であり、小学校入学時の女性の離職、いわゆる“小1の壁”あるいは学童保育が終了する“小4の壁”を乗り越え、女性医師がキャリア継続する上

で、ファミリーサポートは非常に有効な支援である。壁を乗り越えるための支援を医学生が行い、壁を乗り越えた女性医師と接することは、相互援助による生きたキャリア教育として有効であることが期待できる。

さらに、本調査結果で、学生が将来進みたいと考えている専門科がまんべんなく選択されていることは、ファミリーサポート等を介して様々なロールモデルとの接点を設けることの必要性を示している。厚生労働省のポジティブアクション情報のポータルサイトにおいて、今後ますます働き方のダイバーシティ（多様性）が重要となっていく中で、雲の上のような高い存在だけでなく身近に感じられる人も含めた多様なロールモデルを紹介することが有効であると報告⁸⁾されていた。また、初期臨床研修医に関する報告⁹⁾でも、女性医師が専門科を志望する際に結婚や育児に関する懸念が関与しており、様々な分野の女性医師を増加させるためには、仕事と家庭の両立を可能にする具体策立案と女性医師に対するロールモデルが必要であるとしていた。このように多様性の面からもファミリーサポート活動によるロールモデルとのつながりが有効であることが示唆された。

最後に、学生がファミリーサポートでの支援活動を希望する一つの大きな理由として、「女性医師の役に立ちたい」「子育て支援をしたい」など、自分のためではなく、先輩である女性医師の支援をすることを挙げていることに注目したい。また、本調査回答者では、以前にボランティアの経験があるものが3割以上おり、誰かのために自分が何かをしたいと考え、実際に行動している学生が多いことが分かった。医師として非常に重要である他者への思いやりとそれを行動に移す力を兼ね備える女子医学生が多数いることは、今後の日本の医療に明るい希望を与えるものと言えよう。

結 論

女子医学生は、現在も結婚や育児に関する不安を抱いており、ファミリーサポートに対する認知度や期待度が高かった。今後様々な分野の女性医師を増加させ、女性医師のキャリア形成を図るためには、ファミリーサポート活動を通じたロールモデルとのつながりによるキャリア教育が有効である可能性が示唆された。

謝 辞

梅野愛子さんのご協力に感謝する。本研究は文部科学

省周産期医療環境整備事業（人材養成環境整備）男女共同参画型 NICU 人材養成プログラム—地域とささえあう周産期医療—の助成を受けた。

開示すべき利益相反状態はない。

文 献

- 1) 坂東久美子：はじめに、「女性研究者を応援します！—女性研究者の活躍推進のための取組事例—」, ppl, 内閣府男女共同参画局（2008）
- 2) 近藤恵里, 野原理子, 川上順子ほか：ワークライフバランス（仕事と家庭の調和）に関する本学医学部学生の意識調査. 東女医大誌 79（9・10）：386-393, 2009
- 3) 野原理子, 斎藤加代子, 松岡雅人：医科大学および同附属医療施設の勤務医師のワーク・ライフ・バランスに関する認識の男女比較. 東女医大誌 80（12）：363-369, 2010
- 4) 一般財団法人女性労働協会. ファミリーサポートセンター web サイト. http://www.jaaww.or.jp/service/family_support/index.html（2013 年 2 月 15 日閲覧）
- 5) 文部科学省周産期医療環境整備事業（人材養成環境整備）男女共同参画型 NICU 人材養成プログラム—地域とささえあう周産期医療—. <http://www.twmu.ac.jp/NICU-support/>（2013 年 2 月 15 日閲覧）
- 6) 竹宮孝子, 竹内千仙, 児玉ひとみほか：医師の勤務に対応する学童保育支援の検討. 東女医大誌 79（9・10）：394-401, 2009
- 7) 児玉ひとみ, 竹宮孝子, 竹内千仙ほか：医師に対する学童保育支援の必要性. 東女医大誌 80（3）：65-68, 2009
- 8) 厚生労働省, ポジティブアクション情報ポータルサイト, http://www.positiveaction.jp/webmag/vol03/evo03_zadankai_p2.html（2013 年 2 月 15 日閲覧）
- 9) 鈴木 昌, 船曳知弘, 伊藤壮一ほか：初期臨床研修医の専門分野選択に関する調査—男女共同参画の視点から—. 日救急医学会誌 20：181-190, 2009